

少年のいすさ

訳二健橋高 作トケパ＝ック＝ルナギー



世界の児童文学名作シリーズ

さすらいの少年

ギーナ＝ルック＝パウケート作

高橋健二訳 武部本一郎絵



講談社

943 パウケート, ギーナ=ルック

さすらいの少年

ギーナ=ルック=パウケート・作

高橋健二・訳

講談社 1971 (昭和46) 年

232p 23cm (世界の児童文学名作シリーズ)

小学5~6年から

(原著) "JOSCHKO", Gina Ruck-Pauquet

さすらいの少年

定価 600円

昭和46年3月28日 第1刷発行

訳者 高橋健二

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話 東京(945) 1111 (大代表)

振替 東京3930

印刷所 大日本印刷株式会社

錦印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

© 高橋健二 1971

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8097-195540-2253 (0) (児1)

はじめに

これは、さすらいの少年の物語です。広い世界に、なにかすばらしいことのできる美しい場所を求めて、十四さいの少年ヨシユコはさすらいの旅にでますが、ふるさとの小さい漁村をわすれることができません。

さまざまな土地をさまよいながら、ヨシユコはわるい人にでくわしたり、つらいめにあったりしますが、くよくよと人をうらんだり、めそめそとなきごとをいったりしません。いつも明るく、くったくなく生きていきます。そして、旅のとちゅうで出会っている人々から人生の知恵を学びとります。明るいきびきびした話ですけど、子どもなりに人生を考えさせる味わいに富んでいます。

とりわけ、なかのよい道づれだったろばに、しみじみと別れをつげるヨシユコのことばには、みなさんもきつと胸をうたれるにちがいありません。

高橋 健二

もくじ

海への村	11
広い世界を求めて	17
変わらない心	25
最後の夜	32
ヨシュコをさがせ	37
やみのなかの声	42
ジプシーの一隊	48
冒険がはじまった	56
ろばといっしょに	62
ろばを売ろう	71
仕事があった	78
コーヒー店での生活	86



小さな包み……………	92
追われて……………	100
平野をめざして……………	109
にげる人かげ……………	114
せわがやける……………	118
ああ、スープが飲みたい……………	125
さようなら、ダイカ……………	131
奇跡のように……………	137
たのしい暮らし……………	144
ヨゼプのなぞ……………	152
ぼくは出ていくよ……………	162
ぼくの場所はどこ……………	172
たのしさとおそれ……………	180
山へ……………	185



装丁
絵
武安
部野
本光
一
郎雅

はじめての冬……	192
ひつじかいの家……	197
きびしい自然……	203
おおかみの攻撃……	215
ばらの花さくところ……	219



この物語の登場人物

ものがたり

とうじょうじんぶつ

ヨシュコ



バブシュカ



スタリザ



詩人

ヨシュコ この物語の主人公。なにかすばらしいことがあるだろうと、広い世界をゆめみて旅へ出ます。

バブシュカ イグラ―ネ村のやさしい年よりで、ヨシュコの心をほんとうに理解してくれています。

スタリザ 旅のとちゅう、ヨシュコが出会ったジプシーのおばあさんで、人間というものについてヨシュコに教えます。

詩人 ヨシュコがひとりぼっちでさびしいとき、力になります。

ステパン



ダイカ



ヨゼプ



ケマル



ステパン コーヒー店の主人で、ヨシュコをうばいっ
しよにやとつてくれ、しんせつでしたが……。

ダイカ おかあさんに死なれてひとりになったとき、ヨ
シュコと会い、いっしよに旅をします。

ヨゼプ 牧場で働くひねくれ者。しかし、ヨシュコを通
して人間のあたたかさを知ります。

ケマル 山の上のひつじかいで、ヨシュコをあたたかく
むかえてくれます。

JOSCHKO

von Gina Ruck-Pauquet

Copyright © 1963 by Cecilie Dressler Verlag, Berlin

Japanese Translation Rights arranged through

Orion Press 1968.

さすらいの少年

ギーナール
ツクッパ
ウケート・作
高橋健二・訳

海^{うみ}への村^{むら}

村^{むら}が目^めをさますときでした。イグラ―ネ村^{むら}は生きかえるように見^みえました。かべのごつごつした古い家^{いえ}々が、海^{うみ}の小さい入^いり江^えをかこんでいる村^{むら}でした。暑い^{あつ}さはかりはすぎました。夕^ゆがたになりました。村^{むら}の後ろ^{うしろ}の東^{ひがし}の片^{かた}丘^{おか}にはえているオリ―ブの木^きさえ、ほっとして風^{かぜ}にゆれていました。光^{ひかり}がよわまりはじめたので、花^{はな}がぱつとかがやきだしました。バブシユカおばあさんの庭^{にわ}のばらや、家^{いえ}々のまどにならんでいる植^{うゑ}木^きばちのゼラニウムが。

――ろばが鳴^なきだしました。

「ヒアー。」という、長^{なが}くひっぱった悲^{かな}しげな鳴^なき声^{こゑ}が、まがりくねったジグザグなせまい路^{みち}地^じにひびきました。

ヨシユコは涙^{はな}べのりゆうぜつらんのかげで、午後^ごをねてすごしましたが、目^めをこすると、すつくと立^たち上^あがりました。

まもなく漁^{りょう}師^したちがすがたを見^みせるでしょう。小船^{こぶね}はもう、あたたかい、まっ暗^{くら}な夜^{よる}にむかつて乗^のり出^だしていくのを待^{まち}ちかねて、ふるえてでもい



るかのようでした。

バブシユカおばあさんは、いす
を家のまえに持ち出しました。お
ばあさんは糸まきを手に持ってい
ました。ヨシユコはよく見てはい
ませんでしたが、おばあさ
んの指がふとい糸をつむぐようす
を思いうかべることができまし
た。丘の上でライコの声がしまし
た。ライコはいちばんわかい漁師
で、あのようになつていないと
きは、わらっていました。

なにもかもいつものとおりでし
た。ペパとフランカはいどばたで
おしゃべりしていました。女の子
のゼンヤは、にわとりを小屋から
外に出しました。男たちはあくび
をしながら家のまえに出て、日焼

けたほそい顔を空にむけました。太陽はいちだんとひくくしずみました。ねこは、いっしんにえものをねらって、音をたてずにそこらにあるきまわっていました。

船長がまだこないな、とヨシユコは考えました。

ところが、もう船長は、しゅろの木の間にあらわれました。静かなものごしの、背の高い、色の黒いひげだらけの男でした。この男の頭はへんだと、みんながよくいいました。どうやらそれは、かれが、半年間に一しずくの雨もふらないことのあるイグラ―ネなのに、いつもこうもりがさを持って歩いてきたからのようでした。

「ヨシユコ。」と、とつぜんそばで呼ぶ声がしました。「世界じゅうあんたをさがしたわよ。」

そういった小さいザビナのふさふさした黒い髪は、目までたれさがっていました。世界じゅうだつて、この子は世界をどのくらい知っているっていうんだろう。

だが、ヨシユコはへんじをするまもないうちに、なにかを感じました。いつもとはちがっていたのです。

「南だ、南だ。」

と、かれはさげびました。そして、おとなたちのほうへとんでいきました。

南の風がふいてきました。今夜はさかなはとれません。南の風はいわしを追っぱらってしまうので、漁へいってもしかたがないのです。

「南風だ。」

と、アンテはおこつてうなりました。ライコはいまいましそくに、くわえていたばらの花をひらひらさせました。ミルコは、黒いふといまつげの下で、海を見つめてだまっていました。ヤロシユは、小船に持つていくつもりだった毛布をしっぴかりかかえていました。今夜は小船のうえで毛布をかぶってねるはずでした。

ヨシユコはおとなたちを順ぐりに見つめまし



た。南の風はいく日もつづくことがありました。さかなは、イグラ―ネではただ一つの食料でした。それでも――ヨシユコはよろこびました。みんなは今夜は海にでていかないでしょう。でていかなければ、バブシユカの家いえのまえにいます。だして、お酒をのんで話をするでしょう。それを聞いてみると、ヨシユコはおもしろくて、ろばの鳴き声こゑほどのあいだだって、そばをはなれられないのでした。

もう海が波立ちはじめました。まるで怪物が中からかきまわしているようでした。

「南だ。」

と、女たちが心配しんぱいそうな顔かおをしてくりかえしました。それから、夕食ゆうしょくのしたくをしに帰りました。男たちもあとについていきました。

「きょうは、おまえ、だれのところで食事するの。」

と、ペパが帰りがけにたずねました。